

---

# ヘーゲル絶対的相關論の現代的位相

竹村喜一郎

---

## 要約

ヘーゲル (G. W. F. Hegel, 1770–1831) は、主著『論理の学』の第2巻『本質』(1813年)の最終章「絶対的相關」において、カントの『純粹理性批判』同様、哲学の基本的カテゴリーである実体–偶有性、原因–結果、相互作用を展開しているが、実体と偶有性を同一とし、因果性を同語反復と無限進行として斥け、作用–反作用とは異なる相互作用の概念を展開している。そこにはニュートン–カントの不変なものという物質観に対して変化するものという物質把握およびニュートン–カントが因果連関と交互作用を自然理解の核心として重視したのに対して因果連関を相互作用のうちに含めるという世界把握が認められる。科学哲学者マリオ・ブンゲは相互作用を重視する相互作用主義は誤りとしてヘーゲルを批判したが、現代物理学の展開は、物質過程における相互作用の普遍性を認めている。その意味では、ヘーゲルの絶対的相關に表明されている自然–世界把握は、現代物理学のそれと通底する部分を有していると言える。

キーワード：実体，物質，因果性，相互作用，場の概念

## はじめに

ヘーゲルの『論理の学』(*Wissenschaft der Logik*)の第2巻『本質』(*Wesen*, 1813)の最終章「絶対的相關 *Das absolute Verhältnis*」の構成は、「A 実体性の相關 *Das Verhältnis der Substantialität*」, 「B 因果性の相關 *Das Kausalitätsverhältnis*」(a 形式的因果性 *Die formelle Kausalität*, b 規定された因果性の相關 *Das bestimmte Kausalitätsverhältnis*, c 作用と反作用 *Wirkung und Gegenwirkung*)、 「C 相互作用 *Die Wechselwirkung*」となっている。一見して明らかなように、この構成は、カント (Immanuel Kant, 1704–1804) が『純粹理性批判』(*Kritik der reinen Vernunft*, 1. Auflage 1774, 2. Auflage 1781)で展開したカテゴリー表の「3. 關係 *Relation* : 内属性と自存 *Inhärenz und Subsistenz* (実体と偶有性 *substantia et accidens*)、原因性と依存性 *Kausalität und Dependenz* (原因と結果 *Ursache und Wirkung*)、相互性 *Gemeinschaft* (能動者と受動者との交互作用 *Wechselwirkung zwischen dem Handelnden und Leidenden*)」(KrV. A80, B106) およびその展開としての「純粹悟性の原則の体系」における「3. 經驗の類推」(KrV. A176f., B218f.)の「A 第一の類推：実体の常住不変性の原則」、 「B 第二の類推：因果性の法則に従う時間継起の原則」、 「C 第三の類推：交互作用もしくは共同性の法則に基づく同時存在の原則」を前提にしている。だが内容的にはカントとは異なるものである。

ヘーゲルの絶対相関に関しては、管見に触れ得たかぎり、一方ではウラディカのように高い評価を与える研究者がいるが<sup>9)</sup>、もう一方で、ファルクやヴェルフレのように問題点を指摘する研究者もいる<sup>10)</sup>。だが、私見では、これらの研究者はヘーゲルの絶対的相関の内容を表層で取り上げ、ヘーゲルのカントに対する批判の真意に配視しないために、その評価は十全なものとはいえない。ここでまず確認されなければならないことは、カントの関係カテゴリーがニュートンの運動法則を念頭に置いて構成されていることである。このことは、元来『純粹理性批判』の目的の一つが自然科学の基礎づけとされ (vgl. KrV. B17f.), 『自然科学の形而上学的原理』 (*Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*, 1786) において、力学の3法則が物質の自存の法則、慣性の法則、反作用の法則とされ、これらの法則、したがって力学の全法則が実体性、因果性および交互性のカテゴリーに対応するとされていることから明らかである (vgl. SzN. 118)<sup>11)</sup>。

ここから導出されることは、ヘーゲルは、ニュートン-カントとは異なる物質理解を有することによって、偶有性と一体的な実体概念を構成し、ニュートン-カントのように単純な原因と結果の1対1対応を認めなかったために因果関係を同語反復と無限進行と斥け、ニュートン-カントとは異なる相互作用の概念を抱懐していたために作用と反作用とは異なる次元で相互作用の概念を展開したということである。そしてヘーゲルの相互作用概念がケプラーの調和という宇宙観に依拠して構築されていることを省みる時、マリオ・ブングの相互作用主義は誤りであるという主張自身が誤りであることも判明する<sup>12)</sup>。本論では以上の論点の確認を試みたい。

## 1. 実体概念の更新とその視角

改めて確認するまでもなく、実体概念は哲学史上大きな位置を占めてきた。ヘーゲルが「実体性の相関」として展開したのは、直接的にはカントの実体理解への批判としてみることができるので、カントの実体把握の要点を確認することから始めたい。

### (1) カントにおける実体概念とその問題点

#### ①実体規定とその量的性格

カントは、『純粹理性批判』の第一部門「超越論的分析論」第二編「原則的分析論」第二章「純粹悟性の原則の体系」において、時間の3様相すなわち、常住不変 *Beharrlichkeit*、継起 *Folge*、同時存在 *Zugleichsein* に対応する関係のカテゴリーを実体性、原因性、交互性とし、これらがあらゆる経験に先立って存し、これらがはじめて経験を可能にするものとする (vgl. KrV. A177, B219)。こうした観点からカントは経験の類推の第一を「実体の常住不変の原理」とし、その内容を「現象がどんなに変易しても実体は常住不変であり、実体の量は自然において増しもせず減じもしない」(KrV. B224) と展開している。通常これは物質量の保存法則の定式化と解釈されている<sup>13)</sup>。

カントによれば、「あらゆる実体的なものの基体、すなわち物の実際存在に属するものの基体は実体であり、この実体に基づいて現実的存在に属する一切のものが、単なるその限定として思惟されることができるのである」(KrV. B225)。要するに、カントはあらゆるものの基体である実体に基づいて、現実存在に属する一切のものが実体の限定として思惟されるとする。このような実体理

解においては、変化とは状態すなわち偶有性の変易であって、実体そのものは常に同一のままとされる（vgl. KrV. A137f, B230ff.）。

## ② カントの実体概念の問題性

カントの実体規定は、カントの議論そのものに即しても、少なくとも2点において問題性を有している。

第一の問題性は、実体が時間的な常住不変性と規定されながら、時間そのものの直観が不可能なことを理由に実体は空間とされることである。カントは次のように言う。

「なぜならば、空間のみが常住不変的に規定されているもので、これに反して、時間は、したがって内官中にあるものはすべて、絶えず流れ行くものであるからである」（KrV. B290）。

こうしてカントにおいては時間が最初実体とされながら、次には実体であることを否定される。実体に変化しない基底とされ、変化が排除されるからである。

カントの実体概念の第二の問題性は、経験的世界における実体が「物質」（KrV. B277）とされ、その規定が次のように展開されることである。

「空間における実体を我々が知るのは、ただ実体中に働いているところの、他を自己に引き寄せたり（引力）、あるいは自分へ侵入してくるものを阻止したりする力（斥力や不可侵入性）によるのみである」（KrV. A265, B321）。

このような物質概念をカントがニュートンに依拠して構成していることは、ニュートンが「あらゆる物体を構成する最小部分も全て拮りを持ち、硬く、不可入であり、可動的であり、慣性力を授けられている」<sup>6</sup>と規定していることから明らかである。実際カントは『自然の形而上学的原理』において、自らの物質概念をニュートンそのままに「剛体 *einstarrer Körper, corpus rigidum*」（SZN. 87）と規定している。だが物質が剛体であることは確証されたことではない。

## （2）ヘーゲルの実体理解とその存在論的根拠

ヘーゲルが「実体性の相関」において展開したことは、実体と偶有性という伝統的二分法を前提しながら、両者を同一とすることである。こうしたヘーゲルの実体把握の根底にあるのは、第一にはあらゆるものを運動という観点から捉える存在了解であり、第二には独自の物質把握である。以下これらの論点の確認を試みる。

### ① 運動という観点に基づく実体と偶有性の関係把握

ヘーゲルがあらゆる存在者を運動という観点から捉え、実体もそうした観点から常住不変ではなく、変易するものとするのは、もっぱら変易するものとされる偶有性の運動が「実体そのものの静かに立ち現れる運動としての実体の現動性 *Aktuosität*」（GW11. 394）と規定されるところに確認される。

すなわち、まずヘーゲルは先行する「第二章 現実性」の展開結果成立を見た実体を「絶対的な自己へと反省した存在、それ自体で自立的にある存立」（*ebd.*）として存在する「直接的現実性」（*ebd.*）と規定する。しかしヘーゲルは、「光の存在とは、光が輝く[映現する]運動にすぎない」（GW11. 393）と捉えるように、存在を運動という観点から捉え、実体をも次のように説明する。

「映現する運動は自己へと関係する映現する運動であり、この存在は実体そのものである。逆

にこの存在は自己と同一的な否定された存在にすぎず、こうしてそれは映現しつつある総体性である」(GW11.394)。

映現する運動が実体として規定されることによって、ヘーゲルにおいて実体は運動するものであり、不動なもの、すなわち基体ではない。

次に偶有性は、ヘーゲルにおいても、変易するものとして運動の相において捉えられるが、偶有性を構成する諸偶有態は、単に偶然的なものではなく、「存在の諸カテゴリーと本質の反省諸規定が互いに入り混じって映現する運動」(ebd.)として、「必然的な現実的なもの」(ebd.)と把握される。すなわち偶有性の運動は、実体の「現動性」として捉え返されることになり、「偶有性が全実体そのものである」(GW11.395)と言われる。

こうしてヘーゲルによれば、実体は、威力として必然性であり、一方で諸偶有態という否定態の中で実体が自己を持続する運動であり、他方で実体の存立の中での諸偶有態の定立された存在であるから、「この媒辞 [威力] は実体性と偶有性との統一そのものであり、そしてこの媒辞の両端 [実体と偶有性] は固有の存立を持っていない」(GW11.396)。

したがってヘーゲルにおいて実体と偶有性は区別されても同一であり、常住不変なるものの存在は端的に否定される。なお、この章の最後で展開される「絶対的実体 die absolute Substanz」(GW11.409)は、ここで展開された実体概念の宇宙的規模での現実態とみなしうる。

## ②実体概念と物質把握の関連

それではヘーゲルはどのような物質把握を展開しているのか。ヘーゲルは『論理の学』第一部『存在』(1812年)において、『自然科学の形而上学的原理』におけるカントの物質の構成の試み (vgl. SzN. 47, 49, 55) を通常的反省的認識のやり方にすぎないと批判しているが (vgl. GW11.103)<sup>9)</sup>、そこで自らの物質把握は展開していない。

しかし、ヘーゲル固有の物質理解は既にイェナ時代の『惑星軌道論』(*Dissertatio Philosophica de Orbitis Planetarum*, 1801)において、ニュートン力学において定立される剛体としての物質を「死んだ物質」(GW5.241, 246)とし、これに対して自然の活動的生命に即した物質を「実在する物質」(GW5.249)として、空間としての物質概念に反対の規定である「主観性の形式」(ebd.)すなわち時間の契機が付加されなければならないとするところに展開されている。ここにはヘーゲルがニュートンの物質概念が惰性的-静止的であることを批判し、ケプラーが『宇宙の調和』において「運動の本質は『存在 ESSE』ではなく、『生成 FIERI』にある」<sup>10)</sup>と述べていることに倣って、物質概念を運動-生成という観点から構築しようとする姿勢が確認される。さらにニュートンが物質に本質的な性質として固有力あるいは慣性力を挙げながら、重力を物質に本質的なものとしなかったのに対して<sup>11)</sup>、ヘーゲルは「重さは物質の本質を成すものである」(GW5.247)と言い、重さを物質の本質とし、これによって「変化と運動」(GW5.249)を基礎づける。こうした物質把握が実体理解を支え、一貫してヘーゲルによって維持されたことは容易に確認できる<sup>12)</sup>。

現代物理学において永住不変なものとしての実体は否定され、物質、空間、時間は分離しがたい統一を成すと言われることから、ヘーゲルの実体把握およびそれと関連した物質理解は、今日的性格を有していると言える<sup>13)</sup>。

## 2. 因果法則批判としての因果性の相関

ヘーゲルが「B 因果性の相関」として展開しているのは、因果法則に対する批判である。ここでの「a 形式的因果性」および「b 規定された因果性の相関」はカントの第二類推「因果性の法則に従う時間継起の原則」に、「c 作用と反作用」はカントの第三類推「交互作用あるいは相互性の法則に従う同時存在の原則」に対応する。ここに明らかにカントが因果連関と交互作用を並置したのに対して、ヘーゲルは「C 相互作用」を設定することにより、因果連関を相互作用に包摂されるものとした。だがその際、ヘーゲルの「C 相互作用」は、カントの第三類推「交互作用」と同じ次元のカテゴリーではない。そのことは、ヘーゲルが「B 因果性の相関」の範疇を「機械的な関係」（GW11. 407）と規定していることから確認できる。以下カントにおける因果法則の理解の確認から始め、ヘーゲルの因果法則批判の標的が機械論的自然観であることを確認したい。

### （1）カントにおける因果法則理解の3つの内容

カントの『純粹理性批判』の「経験の類推」の第二の類推は「因果性の法則に従う時間継起の原則」とされ、その内容は「あらゆる変化は原因と結果との結合の法則に従って生ずる」（KrV. B232）と表現されている。カントの因果性の取り扱いには以下の3つの内容が認められる。

#### ①経験的認識の基礎としての因果性

第1の内容は、因果性の概念がなければ経験あるいは経験的認識は可能ではないということである。カントによれば、客観的關係が明確なものとして認識されるためには、継起する現象の状態間の關係の先後關係が必然的として規定されるように思惟されなければならない、これを可能ならしめるものは知覚のうちにはない因果關係の概念の他にはない。特に必然性については、「必然性の基準はもっぱら可能な経験の法則、すなわち『生起する一切は、現象におけるその原因によって先天的に規定されている』という法則中に存することになる」（KrV. A227, 280）と言うように、カントは因果法則をその核心に置いた。

#### ②原因と結果の1対1的關係

カントの因果性把握の第2の内容は、因果法則が1つの原因と1つの結果との關係とされていることである。このことは原因と結果との同時存在の可能性として言明されている。カントは具体的に、暖炉が燃えていることと部屋が温かいこと、蒲団の上の球と蒲団のくぼみなどの例を挙げている（vgl. KrV. A202ff., B247ff.）。ここから知られることは、カントにおいては因果連関が1対1的關係においてしか捉えられていないことと因果性を時間の継起の知覚の根拠とする最初の前提が放棄されていることである。

なお、原因と結果を1対1的に捉える姿勢は、ニュートンでは「哲学することの規則」の「規則II したがって自然界の同種の結果は、できるかぎり同じ原因に帰着されなければならない」<sup>(12)</sup>に表明されている。

#### ③原因としての実体と結果としての偶有性

カントの因果性把握の第3の内容は、原因が実体と、結果が偶有性と関連付けられていることである。すなわちカントは、原因—結果の關係を次のように言う。

「元来すべての結果は生起するもののうちに成り立ち、したがって時間が継時的に示すものである変易的なもののうちに成り立つから、生起するものの究極の主体は、あらゆる変易的なものの基体としての常住不変なもの、すなわち実体である」(KrV. A205, B250)。

カントによれば、物体が一様に運動している場合、物体はその運動状態を変えない。「しかし物体の運動が増減する場合には、状態の変化が生ずる」(KrV. A207, B252)。カントにおいては変化するのは状態で、実体は不変とみなされるから、変化を起こすもの、すなわち原因は実体になるのである。だがこの場合、状態の変化の原因が物体の運動の増減あるいは加えられる外力ではなく、実体に求められるという奇妙なことになるのである<sup>(43)</sup>。

## (2) ヘーゲルによる形式的因果性の批判

ヘーゲルは「B 因果性の相関」を「a 形式的因果性」から始める。ヘーゲルのカントの因果性把握の批判は二段階からなる。

### ①因果関係が実体と偶有性の関係として把握されることに対する批判

ヘーゲルは、カントの因果関係の実体-偶有性関係への還元を、ヘーゲル固有の実体-偶有性把握から次のように批判する。

「実体は威力として自己を規定するが、この規定する運動は直接にそれ自身が規定する運動を揚棄する運動であり、還帰である」(GW11. 397)。

ヘーゲルからすれば、原因とは「自分の真理態における実体の威力」(ebd.)であり、結果は偶有性であっても「定立された存在としての実体」(ebd.)であるから、原因と結果の関係はカントのような非対称的な自存と内属の關係に置き換えられるのではない。このようにしてヘーゲルは原因と結果の關係を実体と実体との關係に置き換える。

### ②原因と結果の内容の同一性に対する批判

ヘーゲルは、原因と結果の關係を実体と実体との關係に置き換えた上で、第2段階として因果性における原因と結果との關係に検討を加える。具体的には「原因があれば結果がある」と定式化される因果原理の内容である。ここでは原因と結果は別のものとされる。

ヘーゲルは、因果法則に原因と結果は相等しいという原理があることを確認した上で、この場合原因と結果の間に「一つの統一」(GW11. 398)があることを指摘する。だが原因と結果が別のものとされながら、なお統一が存することは、ヘーゲルにとって両者の内容が同一であること、そしてまた因果性においては新しいものが生起することはないことを意味する。したがってヘーゲルは次のように言う。

「原因と結果とのこの同一性のうちではいまやそれらがそれ自体で存在するもの [原因] および定立された存在 [結果] として区別されるゆえんの形式が揚棄されている」(ebd.)。

以上の議論は自明的すぎる印象を与えるが、因果法則に「原因と結果は相等しい」という原理があることによって、ヘーゲルが言うように、因果性は純粹に新しいものを産出することを不可能にすることが認められている<sup>(44)</sup>。

## (3) 規定された因果性の批判

ヘーゲルは「b 規定された因果性の相関」において、原因と結果が形式上の差異を持つとともに

に内容上の差異を持つ因果性の形態を「実在性と有限性における因果性の相関」(GW11. 399) と名付ける。そしてヘーゲルはこの因果性の相関を二つの下位形態に分けてその批判を行う。

#### ①分析命題としての因果性に対する批判

「実在性と有限性における因果性の相関」の第1形態は「与えられた内容を持ち、自分の諸規定の中で同一の実体であるところのこの同一的なものもとの外的区別という状態」(ebd.)にある因果性と規定されるものである。

この因果性の相関において、原因と結果は差異された形式を持ち、内容も区別があるにせよ、同一の「現実的な、だが有限な実体」(ebd.)のもとの外的区別が立てられているにすぎないので、内容の同一性から、この因果性は「分析命題」(ebd.)とされる。例えば、「雨はそれの結果である湿気の原因である」(ebd.)という命題において、ヘーゲルは、雨が原因、湿気が結果と規定されるにせよ、雨と湿気は水という同一実体の定立されたものであり、この際結果から原因へと遡及することは同語反復的な考察にすぎないとする。ヘーゲルは、ある物体の運動が結果とみなされ、その運動の原因が突く力とされる場合も (vgl. SzN. 112)、衝突の前後に現存しているのは同じ量の運動であるので、この種のタイプの因果性の把握とする (vgl. GW11. 399)。ここには古典力学の法則が同語反復的な分析的命題にすぎないとするヘーゲルの評価が表明されている。

#### ②事象に外的な因果性に対する批判

「規定された因果性の相関」の第二の下位形態は、内容的にさらに2つの形態を持つ。

##### i 原因と結果の外的結合としての因果性

最初の「自己自身に外的なものとしての因果性」(GW11. 402)とは、ある内容に原因という形式が、別の内容に結果という形式が、それぞれ外的に結び付けられることによって成立する因果性の形態である。ヘーゲルが用いている例では、雨が湿気の原因とされる場合、結果としての湿気は原因としての雨と同一の水である。雨は降ることによって湿気（結果）をもたすが、降った雨はもはや空中の水（原因）ではなく、ただの水となり、因果性（雨と湿気の関係）を揚棄する。因果性であることがその因果性にとって外的なものである (vgl. ebd.)。

##### ii 事物から見た因果性の外面性

第2の「それ自身のもので定立された存在ないしは結果であるところの根源性としての因果性」(ebd.)とは、原因とは結果を持つものであるという因果性の相関そのものが、水という実体からすれば、定立された存在、本来のあり方とは異なる存在形態を取るということを内容とする。ヘーゲルは、水が水蒸気として地上から離れて、空中に押し上げられることを「水の根源的な自己との同一性、すなわち重さにとって疎遠な規定」(ebd.)とする。したがって水の原因性（重さ）が、水の塊の雨となって地上に降りることは、水が自己の疎遠な規定を除去して同一性を回復することであるととも、自分に押し付けられた因果性を揚棄することでもある (vgl. ebd.)。

以上から明らかなことは、ヘーゲルが因果性を実在的なものではなく、虚構的なものと捉え、実体と規定される物にとって外的なものとして捉えていることである<sup>(15)</sup>。

#### ③因果法則における無限進行性に対する批判

ヘーゲルは、さらに因果性の問題点として、原因および結果が無限進行に陥ることを指摘する。

すなわち因果性の立場に立てば、まず、ある結果があれば、その原因が探られなければならないことになるが、その原因自身それに先行する原因によって引き起こされた一つの結果であり、さらに先行する原因が探求されなければならない、という形で原因追求は第一原因があれば、それに至るまで無限に繰り返されることになる (vgl. GW11. 402f.)。

ヘーゲルは結果についても同じ事態が生ずることを指摘する。ある原因が一つの結果を引き起こしても、そこで因果関係が完結し完全な結果が現出するのではなく、結果は新たな原因として別の結果を産出し、その結果はまた一つの原因として、他の結果を生む。したがって一つの原因の結果は、無限に展開される結果の連鎖として捉えられなければならない。こうした事態をヘーゲルは次のように表現する。

「因果性はここでは自己自身にとって外的な原因性であるから、因果性もまた同じくその結果において自己へ還帰しないで、結果において自己にとって外的になる」(GW11. 403)。

ここには因果関係が、ニュートン-カントが捉えるような、1つの原因と1つの結果では完結せず、1つの原因から無数の結果が発生しうること、また1つの結果は無数の原因を有しうること、ひいては因果関係には自己否定性があることが指摘されていると見ることができる。<sup>(16)</sup>

ところでヘーゲルは、規定された因果性の相関の運動の無限進行の中で、「因果性の固有の定立する運動」(GW11. 404)が生ずるとする。要するに因果性の否定としての無限進行のうちで生じたことは、それまで異別とされた原因と結果が、原因が結果であり、結果が原因であるという形で、原因と結果の同一性を獲得し、因果性を実現したということなのである。そしてここに成立している原因と結果との同一性は、相互が原因でもあり結果でもある二つの実体の関係としての作用と反作用の連関になる。

以上の「規定された因果性の相関」におけるヘーゲルの因果性批判が単なる形而上学的動機に発するのではなく、即事象的認識に基づくことは、彼が挙げているように、特定の原因と結果を結合することが恣意的な抽象でしかなく、因果性は生命体に妥当せず、歴史的世界に因果性を持ち込むことは不可能であることから確認される (GW11. 400f.)<sup>(17)</sup>。現代物理学においては因果法則が妥当しないことは、典型的にはラジウムの $\alpha$ 粒子の放出時刻を予告できないことによって確認されている<sup>(18)</sup>。

### 3. 「作用と反作用」の固有性と限界

ヘーゲルは、カントが因果性とは区別した「交互作用」を「c 作用と反作用」として因果性の一形態として批判している。まずカントの交互作用の論点を確認しよう。

#### (1) カントにおける交互作用の把握と問題点

##### ①交互作用の原則の意想

カントは「経験の類推」の第三として交互作用の原則を挙げている。それは「交互作用あるいは相互性 Gemeinschaft に基づく同時存在の原則」と称され、内容的には「あらゆる実体は、空間中に同時的なものとして知覚されるかぎり、一貫した交互作用のうちにある」(KrV. B256)と表記され

ている。カントは、同時存在ということ客観的なこととして表象できるためには、並列して同時に存在するものが、交互に継起することについての悟性概念が必要だとし、実体相互間の交互作用があることを実体が空間中に同時に存在することを経験において認識することの前提とするのである（vgl. KrV. B257）。

## ②交互作用の規定の問題性

上の原則の論証の妥当性はともかく、カントにおける交互作用の具体的規定を取り上げるなら、それは次のような形で与えられている。

「しかし、そもそも実体と実体との関係において、(略) 実体が他の実体における諸規定の根拠を交互的に含むような場合は、相互性あるいは交互作用の関係である」(KrV. B258)。

ここに言われるように、二つの実体が相互に自己の諸規定の根拠を他に有する場合が相互性あるいは交互作用である。だがカントの場合、(1) 交互作用はその過程が捉え返されず、(2) 交互作用する実体も自存的に捉えられ、(3) 交互作用が2実体の場合か多数実体の場合か区別がつけられない。

## (2) ヘーゲルにおける作用－反作用の動的理解

ヘーゲルは「作用－反作用」の項においてカントとは異なり、(1) 作用と反作用を2つの実体の同時的運動として捉え、(2) 実体は自存的なものではなく、交互作用の中でその固有性を顕現することを示し、(3) 2つの実体の交互作用は、多数の実体間の相互作用の1局面でしかないことを明らかにする。

## ①2つの実体の同時的運動としての作用と反作用

ヘーゲルは作用と反作用を2つの実体、すなわち「結果を生じる実体」(GW11. 405) あるいは「能動的実体」(GW11. 406) と「受動的実体」(GW11. 405) の間の運動として捉えるが、作用と反作用を別の運動とするのではない。すなわちヘーゲルは能動的実体が原因として受動的実体に作用あるいは結果をもたらす運動を「原因によって規定された存在であることを揚棄する運動、すなわち受動的実体の自立態を揚棄する運動」(GW11. 405) と「原因が自分と受動的実体との同一性を揚棄し、自己を受動的実体の他者として定立する運動」(ebd.) という二重の運動とし、前者を受動的実体が強制力 *Gewalt* あるいは外的なものとしての威力 *Macht* を受ける運動、後者を受動的実体が自己を維持する運動と規定する。つまりヘーゲルによれば、受動的実体が作用の中で自分の定立された存在という自分自身の規定において定立されることは、単に揚棄されることではなく、自分自身と「合体する」(GW11. 406) ことであり、受動的実体が、自分が限定されてあることの中で「根源性」(ebd.) であることを示すことである。根源性であることは自らが原因であることを意味し、ヘーゲルは能動的実体の作用の中で「受動的実体が原因へとひっくり返っている」(ebd.) と規定する。したがってヘーゲルは、受動的実体が原因になることによって、受動的な実体の「反作用一般」(ebd.) が成立するとする。このように能動的実体の作用は受動的実体が原因である反作用を生成させることになるが、このことは最初の実体が再び原因として立ち現れることである（vgl. GW11. 407）。

以上のように、ヘーゲルは作用－反作用という関係を定量的に特定するのではなく、外的に結果的な記述を行うのでもなく、作用即反作用という論理的次元で定式化した。このことは、それ自身一つの固有の価値を有すると言える。

## ② 交互作用の中で現出する実体の固有性

通常2実体の交互作用においては、作用と反作用の量的大きさは等しいとされ、実体の性質に量的変化が起こることは認められても、存在様態の基本的変化は起こりえないとみなされる。しかし、ヘーゲルによれば、「受動的実体は他の強制力の作用を受けることによるのみ自分の権利を得る」(GW11.406)。受動的実体は、一方では能動的実体によって保持ないしは定立されるが、他方ではそのことにより受動的実体が自己と合致し、自己を根源的なもの、すなわち原因にするということは、自己自身の行いとして捉えられる。したがってヘーゲルは「他者によって定立されることと自分の生成とは同じことなのである」(ebd.)と言う。このように、他者によって定立されることが「自分自身の生成」とされたことは、作用の中で、強制力を受けることによるのみ当の実体は真の実体たりうるということを意味する。同じことが能動的実体についても言える。したがって、ヘーゲルの交互作用把握には交互作用によって実体の存在様態が基本的に変化し、固有の存在様態が現出するという理解が含まれている。

## ③ 2実体間の交互作用の限界

ヘーゲルが作用と反作用を因果性の一形態と見ていることは、これが「規定された因果性」に対して「制約された因果性」(GW11.407)と規定され、「有限な因果性」(ebd.)の概念に算入されていることから確認される。ヘーゲルが有限な因果性を超越するものとして「C 相互作用」を展開したことから、2実体間の作用-反作用としての交互作用は限界を有するものとみなされていることが明らかとなる。その理由は既に見た交互作用そのものの中に現れている。

すなわちヘーゲルによれば、この交互作用として現出する制約された因果性において無限進行は生ぜず、原因は結果(作用)において自己自身へと関係する。それゆえヘーゲルは交互作用を「自己内還帰する、無限な交互作用する運動」(ebd.)と規定する。しかし、当の実体をとってみれば、現実的にはそれは単に一つの他の実体とのみ交互作用するのではない。多数あるいは無数の実体との交互作用を視野に入れれば、無数の実体間の相互作用が問題化されなければならないことになる。したがって2実体間の交互作用は関係の形式としては限定されたものにすぎない。

ところで2実体間の交互作用の限界の提示は、交互作用によって万有引力の法則を基礎づけたニュートンに対する批判を内含している。このことは、「無限な交互作用する運動」が、次の「C 相互作用」の冒頭で「機械的關係」(ebd.)と規定されていることが物語っている。ヘーゲルは既に『惑星軌道論』においてニュートン批判の視点を次のように提出している。

「物理学はまずさしあたって全体を定立し、そしてそこからその部分の相互関係を演繹すべきであって、決して互いに対立する力、すなわち部分から全体を構成すべきではないであろう」(GW5.241f.)。

部分から全体を構成しようとしたのが機械論的自然-世界観であるから、ヘーゲルは全体を優先する立場から、機械論的自然-世界観を批判しようとした。それゆえ作用-反作用としての交互作用は、有限な因果性のうちに位置づけられるのである<sup>(19)</sup>。

#### 4. 相互作用における絶対的実体の成立とその論理

ヘーゲルが「C 相互作用」<sup>(20)</sup>において基礎づけようとしたのは、結論的に言えば「絶対的実体」(GW11. 409)である。その際直接的な言及はないにせよ、ヘーゲルはこの概念をカントの相互性および実体の概念の克服として構築しようとしたと見ることができる。それゆえまずカントの相互性の概念と実体概念との関連の確認から始める。

##### (1) カントにおける相互性の概念と実体の概念

###### ①あらゆる実体の相互性

カントが2実体間の交互作用とは異なる、多数の実体の相互作用と言ってよい概念を抱懐していたことは次の言明から明らかである。

「すべての現象がそこにおいて結合されているはずの世界全体の統一が、同時に存在するあらゆる実体の相互性Gemeinschaft (commercium) という、ひそかに想定された原則からの帰結にほかならないことは明らかである」(KrV. A218, B265)。

ここにはあらゆる実体の相互性の原則に基づいて世界全体の統一が生ずるという観念が表明されている。だがカントにおいては、あらゆる実体の相互性は、力学的関係概念の一つ「合成Kompositionの関係」(ebd.)によるとされているように、機械論的でしかない。

###### ②絶対的必然性としての唯一の実体

カントにおいてあらゆる実体の相互性を維持するものが最高の実体であることは、「生起するものの究極の主体は、あらゆる変易的なものの基体としての常住不変なもの、すなわち実体である」(KrV. A205, B250)と言われ、この実体が究極的には「唯一の実体としての最高の存在体」(KrV. A623, B651)と規定され、「事物はすべて唯一なる根源的存在体の絶対的必然性のうちにその根源を有する」(KrV. A816, B844)と説かれるところに明らかである<sup>(21)</sup>。

そしてカントが自由、偶然性、必然性といった概念をこの実体との関わりで「超越論的弁証論」の「純粹理性の二律背反」において展開していることはよく知られている。すなわちカントは第三アンチノミーで自由に基づく原因性を認めた後 (vgl. KrV. A558, B586)、第四アンチノミーで感性界の事物がすべて偶然的であることと全系列を制約する「無制約的必然体」が存在することとは両立することを言明している (vgl. KrV. A561f., B589f.)。論証の妥当性はともかく、カントは弁証論において自由、偶然性、必然性を問題にした。

##### (2) ヘーゲルの「相互作用」における諸実体と絶対的実体

ヘーゲルは「C 相互作用」において生起する内容を2つ挙げている。1つは、直接的な実体の根源的な持続が消失する運動であり、もう1つは、原因が生成する運動と「自分の否定によって自己と媒介するものとしての根源性」である (vgl. GW11.407)。これらの内容を検討してみよう。

###### ①カント的相互性に対する批判としての直接的実体性の消失

直接的実体の根源的持続が消失する運動とは、作用と反作用において定立された2つの実体がそれぞれ他の実体に対して同時に能動的かつ受動的で、両者の区別が揚棄され、区別がまったく「透

明な仮象」となり、相互作用そのものが「空虚な様式」になることと説明されている (vgl. ebd.)。だが相互作用で取り上げられているのはもはや2つの実体ではなく、あらゆる実体と考えてよい。そしてこのような実体のあり方および相互作用の規定は、全体と個別との相互依存関係と見ることができ、その範型は『惑星軌道論』において次のように展開されている。

「どんな物体であれ、たとえそれが自己自身において一つの全体であっても、他の物体に依存しなくても、またもっと大きな体系の一部とか、器官でないような物体などは、まったく存在しない」(GW5.248)。

ここに明らかなように、ヘーゲルはいかなるものも他のものに依存し、大きな体系の一部あるいは器官であるという観点から、個別的諸実体の相互依存関係を重視する形で相互作用を問題にしたと言える。ヘーゲルのこのような部分と全体との関係を重視する見方は、次のような表現からケプラーに由来すると見ることができる。

「宇宙をより完全なものにするのは、隣接する2惑星同士の一対の調和よりもむしろ全惑星の普遍的調和の方である。実際調和はある種の統一の原理である」<sup>(22)</sup>。

このような体系的な依存関係においてはもはや個別的諸実体は個性を維持しながらも、実体性は持ち得ない。実体の区別が「透明な仮象」となり、相互作用が「空虚な様式」になるというのはこうした事態を指していると解される。

そして実体の直接態が揚棄された状態における相互作用とは、D. ボームが言う「相反関係 reciprocal relationship」と同じ内容のものと見ることができる。ボームによれば、あらゆる実体は、その無限の背景及び基礎構造の中に維持されている適当な条件にその存在を委ねており、その背景及び基礎構造に含まれている諸条件も実体との相互関連によって影響されるので、この相互関連は実体の存在様態に質的变化をもたらす。ボームはこのような型の相互関連を、単なる相互作用と区別して「相反関係」と名付ける。そして事物間に相反関係があることは、自然界にある各事物がそれぞれ宇宙全体にある種の寄与をなすとともに、その事物がその根本的特質を他の事物との関係に委ねるから、その事物の存在様態は完全に自立的ではないことを意味する<sup>(23)</sup>。全体と個との関係把握また諸実体が能動的かつ受動的であるという規定から、ヘーゲルが相互作用という概念に込めた内容はこのような事態と言える。それは「合成の関係」として構成されるカントの相互性とは異なる質を有する。

## ②原因が生成する運動とカントの唯一の実体に対する批判

相互作用の中でヘーゲルが問題とする「原因が生成する運動」は、私見では、原因すなわち、絶対的実体を基体であるかのように前提することによって、論理構成上問題を残していると思われるが、要点と意図を確認したい。

ヘーゲルによれば、相互作用が成立するためには少なくとも原因として作用するものと結果として作用されるものの2項が必要であり、その際原因と結果は、相互に他の存在を前提するという関係にあるので、相互に制約するものであり、かつ制約されるものであるという規定を帯びることになる。原因が唯一の実体であっても、事情は変わらず、ここからヘーゲルは、「原因である能動性を制約するものは作用の波及 Einwirkung, 言い換えれば自分自身の受動性だけである」(GW11. 408)

と表現する。ヘーゲルはこの受動性を原因の能動性そのものによって定立された受動性とし、原因をこの受動性によって制約されたものとする。ここで言われる受動性は、明示されていないが、実体性の相関において問題にされた偶有性であり、1つの項とされているが、実際にはあらゆる偶有態である。

したがって原因は、自己を結果とする能動性をもつことによって原因であるにもかかわらず、「制約する運動ないしは受動性」であることによって「原因の自己自身による否定」(ebd.)が生じることになる。ここからヘーゲルは、この場合の相互作用が因果性でしかないことを指摘し、「原因は結果を持っただけでなく、結果において自己自身と関係している」(ebd.)として、因果性〔原因性〕は自分の「絶対的概念」(ebd.)に還帰したとする。それは因果性〔原因性〕がはじめ実在的必然性すなわち自己との絶対的同一性であったが、相互作用のなかで否定を介して自己自身との同一性を顕現したからである。以上の過程が原因が生成する運動である。

だが、注意すべきことは、相互作用が因果性だと言うことによって、ヘーゲルが因果性を相互作用の上位に置こうとしたのではないということである。このことは、相互作用の中で根源的因果性〔原因性〕が因果性の否定、すなわち受動性から生成する運動として、また因果性の否定へと消滅する運動として、「生成」として示される、と言われるところに明らかである (vgl. ebd.)。すなわち因果性の否定である根源的因果性とは因果性を揚棄する運動であって、それ自身が相互作用の中で生起するのであり、相互作用は因果性の根底にあるものとして因果性に優越するカテゴリーなのである。つまり因果性は相互作用の発現形態の1つにすぎない。

ところでヘーゲルが原因が生成する運動に込めた意図は、原因は自己否定を介して原因になりうるという論理を通して、間接的に自己否定を含まないカントの「唯一の実体」は原因たりえないことを主張することである。すなわち、ヘーゲルは原因が生成する運動の帰結を次のように言う。「原因の根拠であるところの否定は、原因が自己自身と合体する肯定的運動である」(ebd.)。ここには「自分の否定によって自己と媒介するものとしての根源性」(GW11. 407)の具体的あり方が叙述されているが、この表現が内包しているのは、カント的な「唯一の実体」は、あらゆるものを必然性として一方的に支配するだけで、自らのうちに否定を含まないがゆえに、真の根源性たりえないということである。

### ③自由の成立と絶対的実体の現出

ヘーゲルは絶対的実体の成立条件を「必然性が自由に高まること」(GW11.408)および「偶然性が自由になること」(GW11.409)とするが、そこにもカント的な「唯一の実体」によって支えられる「世界全体の統一」という構想に対する批判が内包されていることは、相互作用の中ではカントが重視した必然性と因果性が消滅していることが特記されていることから確認できる (vgl. GW11.408)。

すなわち、ヘーゲルによれば、必然性と因果性は「区別されたものの連関と関係としての直接的同一性」(ebd.)と「区別されたものの絶対的実体性、それゆえ区別されたものの絶対的偶然性」(ebd.)という二つのもの、すなわち「絶対的矛盾」(ebd.)を含んでいる。必然性は、存在の自己自身との統一であるにせよ、この統一は映現、関係または媒介にすぎない。因果性は、原因の映現ないしは原因の単なる定立された存在（結果）へ移行する運動であるが、存在と映現との同一性はまだ内的

必然性に留まる。ヘーゲルは、原因の根拠である否定があつてはじめて内的必然性あるいは即自存在は、因果性の運動を揚棄できるとする。ヘーゲルによれば、因果性の運動が揚棄されることによって相関のうちにある両側面の実体性が失われ、内面的であった両側面の同一性が顕現されることによって、必然性は自由に高まる。

ここでの自由は、カントが言う「一つの状態を自ら開始する能力」(KrV. A533, B561)ではなく、「区別されたものの自己自身における同一的な運動」(GW11.409)と規定される。この規定には区別されたもの、すなわち異他的なものの中に同一性を認めるという認識論的局面とともに、自他の区別が現存しつつも他のうちに自己が存在するという共同存在性が内包されている。必然性と自由を相容れないものとするのをヘーゲルは誤りとして斥けるが、その真意は、直接的に必然性と自由を同一視することではなく、自由は必然性を前提し、それを揚棄されたものとして自己のうちに含んでいるという点にある。そのような自由の概念の意義は、単に可能的な自由としての恣意とは異なる、自他の共存という具体的で肯定的な自由の形象化に求められる。

必然性が自由に高まることの中にヘーゲルは同時に「偶然性が自由になる」(edd.) ことを見る。それは、別々に独立した、相互に映現しあわない現実性という形態を持っている必然性の両側面、つまり偶然的なものが、同一性として定立され、その結果それらの区別のうちにある自己内反省の2つの総体性がいまや同一的な総体性としても映現するからである。

そしてこれら2つの総体性が一つの同一的な総体性としてあることが「絶対的実体」と規定されるのである。これは、明示的には説かれていないが、「A 実体性の相関」で展開された、偶有性の総体性が実体であるという論理の宇宙的次元での現実態という意味を持つ。

したがって、絶対的実体といっても、宇宙を構成する諸物の相互作用的關係性の規定態であり、基体となる実体があるわけではない。そのような意味においてヘーゲルが「相互作用」において「原因」を前提することは、立論の便宜とはいえ、彼自身の実体把握と適合的ではないように見受けられる。

それはともかく、ヘーゲルが言う「絶対的実体」は単なるカテゴリーの展開という様相を呈し、具体的内容を欠いているかに見える。だが、カントが言う「世界全体の統一」をより原初的に探究し、世界を構成するあらゆるものがそこから由来する根源体あるいは各々の物体を支える大きな体系の存在を想定するなら、それを絶対的実体と名付けることができる。ボームも次のように言う。

「世界を一つの統一体としての側面から理解するためには、生成過程の中に実際に存在する物質全体が根本的実在the basic reality である、という考えから出発しなければならない。これが根本実在であるのは、その固有の性質が、すべて、それ以外のいかなるものにも依存しない、独立な存在だからである」<sup>(24)</sup>。

ヘーゲルの絶対的実体の提示は、世界を唯一の実体の必然的支配過程とするカントの世界了解に対する批判であるとともに、ボームが言うような、あらゆるものがそこから発現する根本的実在への遡行の試みと解することができる。そのことの意味は「場の概念」の先取りとして後に検討したい。

## ④「概念」の成立

『論理の学』における絶対的実体の成立は「概念 Begriff」への到達をも意味する。以下ではヘーゲルの叙述を確認するに留めたい

ヘーゲルによれば、絶対的実体は、絶対的形式として自己から自己を区別するが、自己を2つの総体性へと区別する形によってである。すなわち一方は、以前の受動的実体が、規定態から自己への反省としての根源的なものとしてできた単一な全体的なものである総体性で、「普遍的なもの」(ebd.)である。他方は、以前の能動的実体が、規定態から自己へと反省した、自己と同一的な否定態として定立されている総体性で、「個別的なもの」(ebd.)である。だが普遍的なものであるものとしての否定的なものであることによって自己と同一的であるので、個別的なものと同じ否定態である。また個別性は、規定されたもの、否定的なものとしての否定的なものであるから、普遍性と同じ同一性である。この両者の単一な同一性が「特殊性」(ebd.)であり、特殊性は、個別的なものからの「規定態の契機」と普遍的なものからの「自己内反省の契機」とを直接的な統一のうちを含んでいる。これら3つの総体性は同じ一つの反省であり、これが「概念、主観性または自由の国」(ebd.)である。かくして『論理の学』そのものは次の段階『概念』に入る。

## 5. ヘーゲル絶対的相関論の現代的意義

ここではヘーゲルの絶対的相関論の現代的意義として、(1) 機械論的自然—世界把握の批判、(2) 相互作用の根源性の提示、(3) 場の概念の先取り、(4) trans-action の論理の定立といった諸点を確認する。

## (1) 機械論的自然—世界把握の批判

ヘーゲルが機械論的自然—世界把握に批判的であったことは、既に『惑星軌道論』が示していた。そこでヘーゲルはケプラーに倣って「太陽系と呼ばれる有機体」(GW5.237)を「理性の崇高で純粋な表現」(ebd.)とし、その「全体そのものの理性的な関係」(GW5.238)を明らかにするものを「真の哲学」(GW5.241)とする。それに対してヘーゲルによれば、ニュートンの「実験哲学」(ebd.)はその原理を力学から借り、「物体が自分に無縁な力によって動かされるといったような機械的關係」(GW5.239)を持ち込むことによって「自然の偽造」(GW5.241)を行う。ここからヘーゲルは物理学の方法を全体から発するものとし、部分から全体を構成しようとする立場を機械論と批判した。

ヘーゲルのこのような全体と個別との関係把握は、ハイゼンベルクの、次のような、世界をニュートン力学で表現されるものより複雑な、別種の連関と捉える見方につながる。

「世界は事象の複雑な組織として現れ、その中でいろいろな種類の関連が入れ替わり、重なり合い、または組み合わされ、それによって全体の構造を決定する」<sup>(29)</sup>。

世界を全体と個別の相互依存的関係性において捉える点においてヘーゲルは、ハイゼンベルクが述べるような世界を事象の複雑な組織と見る把握を先取的に表明していた。

## (2) 相互作用の根源性の提示

ヘーゲルの絶対的相関の第二の意義は、あらゆるものの相互作用が根源的であること提示したこ

とである。彼が形象した「絶対的実体」においては、あらゆるものが同一的な総体性としてありながら、普遍的なものと個別的なものが相互に作用しあっている事態が叙述されている。これはボームの「相反関係」の定式化の先取りである。

なお、相互作用を重視する立場をブングは相互作用主義と規定し、ヘーゲルをその中に含めて、多岐にわたって批判を展開している。今論点を2つに限定するなら、その1つは、相互作用主義は作用が反作用に対して時間的に優先している、あるいは先行していることを無視するから誤りであるとされる。例として $\pi$ 中間子が、 $\pi \rightarrow \mu + \nu$ という図式に従って、ニュートリノ $\nu$ を放出して $\mu$ 中間子に変わる過程が挙げられ、これは不可逆な、典型的に生成的な過程とされている<sup>(26)</sup>。しかし、作用と反作用をすべて時間的な先後関係に置き換えることができないことは、ヘーゲルの作用-反作用の同時的取り扱いが示していた。またブングが生成的過程とする $\pi$ 中間子の変換は、あくまでも相互作用であるという見解もある<sup>(27)</sup>。

ブングのもう1つの批判は、相互作用を重視する考え方を推し進めるなら、ひと塊の宇宙という有機体論的宇宙観が生じ、そこには偶然も自由も存在する余地がなくなるというものである<sup>(28)</sup>。だが有機体論的宇宙観を抱懐したにせよ、ヘーゲル自身相互作用の中で自由が現出することを論証しようとした。またボームが表明したように、相反関係において全体が一方向的に個別を支配するということはない。むしろあらゆるものを必然性の鉄鎖に縛り付けるのは機械論である。ブングの批判に反して相互作用主義は個別に固有の価値を認め、その自由を尊重するものと言える。

### (3) 場の概念の先取り

ヘーゲルが相互作用の帰結とした絶対的実体をボームが言う根本的実在と捉えるなら、そこに個別的なものを普遍的なものの一結節とする存在観が認められ、それ自身「場 (field, Feld)」の概念の先取りと見ることができる。場の概念については、歴史的成立経緯は省略して、ボームの規定を掲げておく。

「場の概念は、空間内に物体が何も含まれていない時でも、空間には、連続的に変化する場が存在しうることを意味する。これらの場が、エネルギー、運動量、角運動量などを運ぶことを示せることから、場は、運動体と同じような性質を持つことも可能である」<sup>(29)</sup>。

補足すれば、場は空間内の複数の点を、重力とか電磁気力といった何らかの力によって結びつける、一種の基質あるいは媒介物であり、力はこの場における波動として表わされる。このような場の概念においては、物質(粒子)は背景にある場から短期間出現して再び場の中に消える、小さなエネルギーの結節点にすぎず、どんな場もエネルギーを含み、その限りで物質を形成するから、唯一の基本的実在は、個々の物質ではなく、その背景にある場そのものであることになる。

ただしヘーゲルの場の概念につながる発想もやはりケプラーの影響によるものと解される。ケプラーは、惑星本体を取り囲んで運ぶ力の存在を指摘し、この力について、「この力(つまり形象)は幾何学的な立体ではなく、光とまったく同様にある種の平面のようなものであろう」<sup>(30)</sup>と言うからである。このようにケプラーが惑星を運ぶ力を、ニュートンのように遠隔力とせず、「平面」のようなものとするところに、アーサー・ケストラーは重力場あるいは電磁場といった現代的な場の概念への近さを認めている<sup>(31)</sup>。ヘーゲルはこのようなケプラーの力の捉え方を「絶対的実体」のうちで

展開したと言える。

#### （4）trans-action の論理の定立

最後にヘーゲルの絶対的相関の把握には、デューイ（John Dewey,1859-1952）によって定式化された trans-action の論理が確立されていることが確認される。

デューイは self-action と inter-action および trans-action を区別し、その意味を概略次のように述べている。アリストテレス以降の自然哲学が自然現象の基礎に実体の自己活動 self-action を置いたのに対し、ニュートンは物理現象を物体間の相互作用 inter-action, すなわち事物と事物との因果的ないしは相互的關係として捉えた。しかるにアインシュタイン（Albert Einstein,1879-1955）によって場の理論が確立され、以前には分離して考えられたものの相互作用に先行する作用ともいべき trans-action をもって物体間の根源的な作用とみなされるようになった。例えば地球上の二物体は、初めより同一地球という存在の場を共有し、相互にその存在のために互いに他を要求するという未分の関係にある。このような相互作用以前の作用が trans-action であり、こうした作用を行う物体は、相互的に存在し、自己の存在は他者の存在を前提にして成立するとともに、他者の存在も同様に自己の存在をその存在の根底に要求する<sup>(32)</sup>。

ヘーゲルが、個別的なものを大きな体系の一部あるいは器官と規定し、あらゆるものを相互依存の関係において捉えたことのうちに相互が他の存在の原因であり、条件であることが明示されており、デューイ以上に厳密にデューイが言う trans-action が言い当てられているのである。

#### むすびにかえて

ヘーゲルの絶対的相関は、二項的關係概念の究極的形態であるが、一方では実際にはそれ以前に展開された『本質』におけるあらゆる関係概念の根底にあるものであると同時に、以後の『概念』において展開される普遍・特殊・個別という三項的關係概念の出発点でもある。それゆえに絶対的相関はヘーゲルの哲学的発想の凝縮体であり、そこには彼のケプラー体験が息づいている。ヘーゲルはケプラーの惑星の運動把握に依拠して世界の相互依存性を論理化しようとしたが、天体の運動が法則通りではないことを「摂動」(GW5. 252) の存在から知り、自然法則、ひいてはニュートンの運動法則の厳密な妥当性が成立しないことを確認し、因果性の批判を展開したといえる。ボームはその相反的關係の定式化を通じて、因果性あるいは必然性と偶然性とが世界の2契機であることの根拠を明示したが<sup>(33)</sup>、ハイゼンベルクも同様の世界把握の上に現代物理学において因果法則と物質保存の法則が妥当しないことを明言している<sup>(34)</sup>。この意味においてヘーゲルの絶対的相関論は、現代科学の基本姿勢に通底していると見ることができる。したがってヘーゲルがカントの交互作用とは異なる相互作用の段階を明示したことは、哲学的思索の歴史における画期だったのであり、そこにはファルクやヴェルフレが言うような、形而上学の伝統への回帰ではなく、むしろカント哲学が実際にはスコラ哲学の伝統の枠内に留まることへの批判があったのである。

（たけむら・きいちろう つくば国際大学非常勤講師）

## 参考文献

- Max Born (1949): *Natural Philosophy of Cause and Chance*, Clarendon Press, Oxford.
- Mary B. Hesse (1962): *Forces and Fields, A Study of Action at a Distance in the History of Physics*, Philosophical Library, New York.
- J. L. Mackie (1980): *The Cement of the Universe. A Study of Causation*, Clarendon Press, Oxford.

## テキスト

括弧内の略符号はそれぞれ次のテキストを表し、後続する数字でページ数を示す。

GW11= Georg Wilhelm Friedrich Hegel *Gesammelte Werke*, Band 11: G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik. Erster Band: Die objektive Logik* (1812/1813), herausgegeben von F. Hogemann und W. Jaeschke, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1978. 引用に際しては寺澤恒信訳・ヘーゲル『大論理学』2 (以文社, 1983年)を参照したが、訳文は適宜変更を加えた。

GW 5 = G. W. F. Hegel *Gesammelte Werke*, Band 5: G. W. F. Hegel, *Schriften und Entwürfe* (1799–1808), herausgegeben von M. Baum und K.R.Meist, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1998. 引用に際しては, G.W.F.ヘーゲル著・村上恭一訳『惑星軌道論』(法政大学出版局, 1991年)を参照した。

KrV= Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (1.A. 1781, 2.A.1787), herausgegeben von R. Schmidt, Felix Meiner, Hamburg 1956. Aで初版, Bで第二版を表し, その後の数字でページ数を示す。

SzN= I.Kant, *Schriften zur Naturphilosophie*, Werkausgabe Band IX, herausgegeben von W.Weischedel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1977.

## 注

- (1) ウラディカは、ヘーゲルが偶有性の運動を「実体の現動性 Aktuosität」と捉えたことを、カントにはないヘーゲルの固有性と指摘している。Michael Wladika (1995), *Kant in Hegels "Wissenschaft der Logik"*, Peter Lang, Frankfurt am Main, S. 452. しかし、このような把握だけでは、ヘーゲルの実体概念が物質把握の次元でのニュートン-カント批判を内包していることが看過されてしまう。
- (2) ファルクは、ヘーゲルの絶対的相関は、先行する様相論で成立した絶対的必然性から「概念」における自由に至る「つなぎ」の位置を占めるにすぎず、カント以来認められてきた経験的認識の客観性を構成する上での主要な役割を果すことなく、背後に様相論的解釈を潜めることによって、形而上学への回帰を隠蔽しているに過ぎない、と批判している。Hans-Peter Falk (1983), *Das Wissen in Hegels »Wissenschaft der Logik«*, Verlag Karl Alber, Freiburg/München, SS. 156–163.

また、ヴェルフレは、ヘーゲルが「作用と反作用」と「相互作用」とを異なる段階とし、異なる節に割り当てたことを根拠がない、としている。Gerhard M. Wörfle (1994), *Die Wesenslogik in Hegels „Wissenschaft der Logik“: Versuch einer Rekonstruktion und Kritik unter besonderer*

*Berücksichtigung der philosophischen Tradition*, Friedrich Frommann Verlag, Günther Holzboog, Stuttgart-Bad Cannstatt, SS.504–506.

- (3) ニュートンの運動法則については、次の書の該当箇所を参照。 *Sir Isaac Newton's Mathematical Principles of Natural Philosophy and His System of the World* (1934), translated by A. Motte and revised by F. Cajori, University of California Press, Berkley, p.13.
- (4) Cf. Mario Bunge (1979), *Causality and Modern Science*, third revised edition, Dover Publications, Inc., New York, p. 160, 162.
- (5) Vgl. Gottfried Martin (1969), *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, vierte Auflage, Walter de Gruyter & Co., Berlin, S. 80.
- (6) *Newton's Principles*, p. 399.
- (7) カントの物質構成の試みは、ニュートンの物質理論に対する動力学的観点からの批判を含むものであったが、失敗に終わった、という評価がある。Vgl. Karl-Norbert Ihmig (1989), *Hegels Deutung der Gravitation : eine Studie zu Hegel und Newton*, Athenäum Verlag GmbH, Frankfurt am Main, S.108f.
- (8) Iohannis Kepleri (1619), *Harmonices Mundi*, Libri V, cap. 9. In : Johannes Kepler Gesammelte Werke, Band 6 : *Harmonice Mundi*, herausgegeben von M. Casper, Ch. Beck, München 1940, S. 332. 岸本良彦訳 (2009)・ケプラー『宇宙の調和』工作舎, 465ページ。
- (9) Cf. *Newton's Principles*, p.400
- (10) Vgl. G. W. F. Hegel(1817), *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. In : G. W. F. Hegel Gesammelte Werke, Band 13 , herausgegeben von W. Bonsiepen und K. Grotzsch, Felix Meiner Verlag, Hamburg 2000, S.123.  
なお、B. フェルケンブルクは、ヘーゲルの物質理論をカントの『自然科学の形而上学的原理』の伝統の枠内にあるものと位置づけている。Vgl. Brigitt Falkenburg (1987), *Die Form der Materie : Zur Metaphysik der Natur bei Kant und Hegel*, Athenäum, Frankfurt am Main, S.192, 207, 223. だが、彼女の結論は、ヘーゲルの『惑星軌道論』におけるニュートン-カント的物質観の批判、『論理の学』におけるカントの実体概念の批判に対する検討を欠落させているがゆえに一面的でしかない。
- (11) Cf. Peter Mittelstaedt (1976), *Philosophical Problems of Modern Physics*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht/Boston, pp.114–132. Gerhard Hennemann (1975), *Grundzüge einer Geschichte der Naturphilosophie und ihrer Hauptprobleme*, Duncker & Humblot, Berlin, S.191,200f.
- (12) *Newton's Principles*, p. 398.
- (13) ブンゲによれば、因果論は、スコラ哲学において実体と属性あるいは偶有性との関係として捉えられた。Bunge, op.cit., pp. 198–200. マルティンは、カントの実体概念ひいては因果性の概念がアリストテレスおよびトマス・アクィナスの伝統に結びついていることを指摘している。Martin, a. a. O., S. 97f., 197f.
- (14) ブンゲは因果性が純粋に新しい物を不可能にすることを認めながら、因果性の積極的側面を

探っているが、説得的とは見受けられない。Cf. Bunge, op. cit., pp. 203–217.

- (15) D. ボームも力学的自然科学が純定量的法則によって多様な事物を秩序できるという仮説に立脚していることを認めている。Cf. David Bohm(1957), *Causality and Chance in Modern Physics*, Routledge & Kegan Paul, London, p.37.
- (16) ブンゲも原因および結果に無限進行が生じることを認めている。Cf. Bunge, op.cit., pp.134-137. ボームもニュートンが想定した原因と結果との1対1的対応はありえないことを確認している。Cf. Bohm, op. cit., p. 35.
- (17) ヘーゲルが挙げる因果性の非妥当領域は、ブンゲによっても認められている。Cf. Bunge, op. cit., pp. 262–280.
- (18) Vgl. Werner Heisenberg (1959), *Physik und Philosophie*, Ullstein, Frankfurt am Main 1984, S. 68.
- (19) ニュートンの万有引力の法則が2実体間の交互作用を基礎とすることは、ニュートン自身によって表明されている。Cf. *Newton's Principles*, p. 414 seq..

現代においてニュートンの問題性が様々な面で明らかにされてきている。例えば、力学の中心をなす力の概念が統一性を持たないことがウエストフォールによって明らかにされている。Cf. Richard S. Westfall (1971), *Force in Newton's Physics*, Science History Publications, New York, pp. 414–525. 物質概念も一義的ではないことが他の研究者によって解明されている。Cf. Ernan McMullin (1978), *Newton on Matter and Activity*, University of Notre Dame Press, Notre Dame, pp. 106–109.

またニュートンの科学理論の実際の歴史的性格については次の諸論文によって輪郭が与えられている。C. Truesdell (1970), Reactions of Late Baroque Mechanics to Success, Conjecture, Error, and Failure in *Newton's Principia*, in: *The Annus Mirabilis of Sir Isaac Newton 1666–1966*, edited by R. Palter, The M. I. T. Press, Cambridge, pp. 192–232. R.S. Westfall (1973), Newton and the Fudge Factor, in : *Science*, vol. 179, Number 4075, pp. 751–758. Craiq B. Waff (1976), Isaac Newton, The Motion of the Lunar Apogee, and the establishment of the Inverse Square Law, in : *Vistas in Astronomy*, vol. 20, pp. 99–103.

- (20) 交互作用も相互作用もドイツ語では同一の Wechselwirkung で表現されるが、訳語としては作用–反作用のような2実体間の運動を「交互作用」、多数実体間の運動を「相互作用」でそれぞれ区別して表現する。
- (21) マルティンによれば、カントの Gemeinschaft の概念は、「神の王国」の概念を内包し、神が王国の主宰者として有限的主観との相互性の関係を取り結ぶことを内容とする。Martin, a. a. O., S. 233.
- (22) Kepler, *Gesammelte Werke* 6, S. 362. ケプラー『宇宙の調和』512ページ。
- (23) Cf. Bohm, op. cit., p.144. この場面でのヘーゲルの論の展開からボームの言う相反関係の内容を読み取ることは困難かもしれないが、『精神現象学』(1807)において展開された「精神的実体」の内容は、ボームのものと同じである。Vgl. G.W.F. Hegel, *Gesammelte Werke*, Band 9. *Phänomenologie des Geistes*, herausgegeben von W. Bonsiepen und R. Heede, Felix Meiner Verlag,

Hamburg 1980, S. 239.

- (24) Bohm, op. cit., p.168.
- (25) Heisenberg, a.a.O., S. 85.
- (26) Cf. Bunge, op.cit., p. 163.
- (27) Cf. Lewis H.Ryder (1996), *Quantum Field Theory*, second edition, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 1–7.
- (28) Cf. Bunge, op. cit., pp. 98–101.
- (29) Bohm, op. cit., p. 44.
- (30) Ioannis Kepleri (1609), *Astronomia Nova*, in: Johannes Kepler, *Gesammelte Werke*, Band 3: *Astronomia Nova*, herausgegeben von M. Casper, C.H. Beck, München 1937, S.240. 岸本良彦訳 (2013) ・ケプラー 『新天文学』 工作舎, 355ページ。
- (31) Arthur Koestler (1959), *The Sleepwalkers : A History of Man's Changing Vision of the Universe*, Penguin Books, London 1989, p. 346.
- (32) Cf. J. Dewey, *Knowing and the Known* (1948). In: John Dewey :*The Later Works, 1925–1953 . Volume 16: 1949–1952, Essays, Typescripts, and Knowing and the Known*, Edited by J. A. Boydston, Southern Illinois University Press, Cabondale 1989, pp. 100–109.
- (33) Bohm, op. cit., pp. 140–143
- (34) Heisenberg, a. a. O., S. 67.

## The modern Aspects of the Absolute Relationship in Hegel's "Science of Logic"

Kiichiro Takemura

In the last chapter of the *Essence* in his "Science of Logic" Hegel treats the basic categories of the relation, substance-accidental, cause-effect, and interaction like Kant. But, contrary to Kant, Hegel identifies the substance with accidentals, rejects the causality by reason of its tautology and endless progression, and develops the original concept of the interaction different from the mutual action as action and reaction.

As in the Modern Physics the law of conservation of matter and the law of causality are denied and the interaction is attached importance to, Hegel's assertion is justified.

In conclusion Hegel deploys the concept of the Absolute Substance, in which we can recognize his critique against the mechanical conception of the nature and the world, the birth of the field concept, and the establishment of the concept of trans-action.

Hegel was influenced by Kepler, but by his own effort, he constructed the world-view akin to the Modern Physics.

Keywords: substance, matter, causality, interaction, field concept